

「働くママ」学生が体験

仕事と育児の両立を実感できるインターンシップ（就業体験）が、就職活動中の女子学生らの間で広がりをみせている。将来の両立についてイメージし、仕事選びに役立ててもらおうという取り組みだ。（宮木優美）

先月下旬、名古屋市内の大学に通う3年生の榊原美咲さん(21)は、同市内の社会保険労務士事務所「Beepartナース」でインターンシップを行った。

仕事の体験を終えると、社員の安田あかねさん(34)と一緒に、郊外の保育園に向かった。安田さんの3歳の長男を迎えに行くためだ。長男と手をつなぎ、楽しそうに家路を急ぐ安田さんの姿を見て、榊原さんは「安田さんのように、子どもを持つても、ずっと続けたいと思えるような仕事に就きたい」と話す。

このインターンシップを企画したのは、同市内のPR会社「グローバルステージ」。2011年の秋から始め、愛知県内の中小企業などの協力

で、これまでに7人の学生が体験した。仕事の後、子育て中の社員の自宅に行き、子ども

もと遊んだり、一緒に食事したりする。

同社代表の大洲早生季さんは「働く母親は大変だと思われがちですが、ポジティブで生き生きとしている人が多い。その姿を学生たちに知ってもらい、就職活動の参考に



子どもと楽しげに帰宅する安田さん(左)に同行する就職活動中の榊原さん(名古屋市内で)

仕事と育児両立する姿学ぶ

してほしい」と話す。

厚生労働省の「働く女性の実情」（2011年版）によると、結婚後も働く女性の割合は増え続けているが、出産を機に約6割が離職する状況は、この20年間変わっていない。さらに、不況に伴う労働環境の悪化や保育園の不足といった両立の厳しさが伝えられ、女子学生の専業主婦志向が強まっていると言われる。

「スリール」（東京）は、共働き家庭で学生に子育てを体験させる「ワーク&ライフ・インターンシップ」事業を、首都圏で手がけている。社長の堀江敦子さんは、「『私には両立なんて無理』と思い込んでいる学生に、ぜひ体験してほしい」と話す。

学生たちは、3か月間、週に1、2回のペースで共働き家庭に通い、保育園や小学校から帰った子どもの世話をし

たり、親の話を聞いたりして、両立を学ぶ。2010年のスタート以来、これまでに約100人の学生が参加した。

昨年、このインターンシップを体験した大学3年の鈴木麻仁さん(22)は、受け入れ家庭の小学生が「うちのママすてきでしょ」と自慢するのを聞いて、就職活動への考え方が変わった。「それまでは働きたくないと思っていたが、子どもからすてきと思われる女性になりたいと思うようになった」と話す。

女性のライフスタイルに詳しいジャーナリストの白河桃子さんは、「雇用が不安定になり、夫婦共働きでなければ乗り越えられない時代になっている。一方で、女性が妊娠できる時期は意外と短い。学生たちには、働くことと産むことをしっかり考えながら、就職活動を頑張ってもらいたい」と話す。